

● 令和6年（2024年）の日本の主な火山活動

【北海道地方】

^{しれとこいおうざん} 知床硫黄山【噴火予報（活火山であることに留意）】

7月及び9月の上空からの観測（それぞれ国土交通省北海道開発局及び第一管区海上保安本部の協力による）では、噴気は認められず、地形や植生に特段の変化はなかった。北西側中腹の爆裂火口の弱い地熱域の地表面温度分布に特段の変化はなかった。北西側の海岸付近には、引き続き温泉水による変色域が認められた。

^{てんちょうざん} 天頂山【噴火予報（活火山であることに留意）】

7月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、噴気は認められず、地形や植生に特段の変化はなかった。

^{ましゅう} 摩周【噴火予報（活火山であることに留意）】

7月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、噴気は認められず、地形や植生に特段の変化はなかった。

アトサヌプリ【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

硫黄山の噴気活動は低調に経過した。7月、9月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）及び10月の現地調査では、硫黄山の各噴気孔の状況や熊落し火口等の熱活動に特段の変化は認められなかった。

アトサヌプリ西側約5km付近で1月12日から13日にかけてまとまって地震が発生し、弟子屈町サワンチサップで震度1以上を5回観測した。このうち13日15時55分に発生したマグニチュード4.0の地震で最大震度4を観測した。2月以降、地震活動は概ね低調に経過した。硫黄山付近の地震活動は低調に経過した。

GNSS連続観測では、2021年秋以降、アトサヌプリ西側の膨張を示すと考えられる地殻変動が続いたが、2024年1月以降、概ね停滞した。9月末から10月頭の硫黄山付近のGNSS繰り返し観測では、地殻変動に特段の変化はみられなかった。

^{めあかんだけ} 雄阿寒岳【噴火予報（活火山であることに留意）】

7月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、北側斜面に噴気は認められず、地熱域の地表面温度分布に特段の変化はなかった。

^{めあかんだけ} 雌阿寒岳【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

各火口の噴気活動は低調に経過した。

7月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、ポンマチネシリ第3火口内に昨年と比べてわずかな地熱域が認められたが、8月に1回、9月に2回実施した上空からの観測（国土交通省北海道開発局及び第一管区海上保安本部の協力による）及び9月の現地調査では、これに相当する地熱域は認められず、各火口の噴気及び地熱域の地表面温度分布に特段の変化は認められなかった。

地震活動は概ね静穏に経過した。ポンマチネシリ火口付近の浅部では、3月22日から26日及び4月20日に振幅の小さな地震がやや増加した。また、8月から9月中旬にかけてもやや多い状態で推移した。

6月2日及び11月6日に、継続時間の短い火山性微動が発生し、いずれもポンマチネシリ火口周辺の傾斜計及び広帯域地震計で火口方向が上がるわずかな傾斜変動を伴った。

全磁力連続観測では、3月頃からポンマチネシリ96-1火口近傍の地下の熱活動の高まりを示すと考えられる全磁力値のわずかな減少がみられたが、7月以降は概ね停滞して推移した。

GNSS連続観測では、4月頃から6月頃にかけて山体の膨張を示すと考えられる基線のわずかな伸長がみられた。9月のGNSS繰り返し観測では、2020年頃から続く96-1火口付近浅部のわずかな膨張を示唆する基線の伸長、2019年頃から続く中マチネシリ火口浅部の膨張を示唆する基線の伸長が認められた。

^{まるやま} 丸山【噴火予報（活火山であることに留意）】

8月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、第1～第3火口に噴気は認められず、第3火口内の弱い地熱域の地表面温度分布にも特段の変化はなかった。

^{たいせつざん} 大雪山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

旭岳地獄谷爆裂火口の噴気活動及び地震活動は低調に経過した。

7月及び8月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、旭岳地獄谷爆裂火口内の噴気の状況や地表面温度分布に特段の変化はなかった。また、御鉢平に噴気は認められ

用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

ず、地表面温度分布に特段の変化はなかった。

^{と か ち だ け}
十勝岳【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

62-2火口の噴煙の高さは2021年春以降高い状態が続いており、概ね火口縁上500m以下で経過した。62-2火口に隣接する大正火口の噴気は200m以下、振子沢噴気孔群の噴気の高さは稜線上200m以下で経過した。また、前十勝の北西側斜面では時々弱い噴気を確認した。

9月25日から26日にかけて、山麓の高感度監視カメラにより62-2火口のごく微弱な火映を観測した。62-2火口内での高温ガス噴出や硫黄燃焼等によると考えられる。

7月及び9月の上空からの観測（それぞれ国土交通省北海道開発局及び第一管区海上保安本部の協力による）では、振子沢噴気孔群の活発な噴気活動や前十勝北西側斜面の地熱域の状況に2023年と比べ特に変化はみられなかった。6月及び7月の現地調査では、62-2火口内で高温火山ガス噴出や昇華硫黄付着を確認するなど、活発な熱活動が継続していた。また、その他の火口の状況に特段の変化はなかった。

2月及び9月に実施した火山ガス（二酸化硫黄）観測では、1日あたりの放出量はそれぞれ約400トン及び約200トンで、2023年と比べて減少した状態だった。

火山性地震は概ね少ない状態で経過し、震源は主に62-2火口付近のごく浅いところ、旧噴火口付近及びグラウンド火口付近のごく浅い所～深さ1kmに分布した。

3月30日に継続時間約23分間の火山性微動が発生し、62-2火口周辺の傾斜計でわずかな傾斜変動を伴った。また、4月に2回、7月に1回継続時間の短い微動が発生した。

GNSS連続観測では、2021年以降、山体浅部の収縮を示唆する地殻変動が続いているが、2023年頃から鈍化が認められる。6月の繰り返し観測でも、前回（2023年6月）と比べ山体浅部の収縮を示す変動が観測された。山体深部の動きを示すと考えられる特段の地殻変動は観測されていない。

^{り し り ざ ん}
利尻山【噴火予報（活火山であることに留意）】

7月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、北西側の溶岩ドーム群及び南側スコリア丘群付近に噴気や地熱域は認められず、地形や植生にも特段の変化はなかった。

^{た る ま え さ ん}
樽前山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

山頂溶岩ドーム周辺の各火口及び噴気孔の噴気活動は低調だが、2021年秋以降やや増大した状

態が継続している。

4月、9月及び10月の上空からの観測（4月及び9月は国土交通省北海道開発局、10月は北海道の協力による）及び6月の現地調査では、山頂溶岩ドーム周辺の噴気の状況や地表面温度分布に特段の変化はなく、高温状態が継続していたが、A火口では引き続き温度の低下が認められた。

地震活動は概ね静穏に経過したが、山頂溶岩ドーム直下浅部では、12月中旬に振幅の小さな地震がやや増加した。

GNSS連続観測及び6月の山頂付近のGNSS繰り返し観測では、地殻変動に特段の変化は観測されなかった。

^{え に わ だ け}
恵庭岳【噴火予報（活火山であることに留意）】

9月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、山頂東側の爆裂火口内の弱い噴気及び地熱域の地表面温度分布の状況に特段の変化はなかった。

^{く っ た ら}
倶多楽【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

各火口の噴気活動及び地震活動は低調に経過した。

4月、9月及び10月の上空からの観測（4月及び9月は国土交通省北海道開発局、10月は北海道の協力による）では、各火口の噴気の状況及び地表面温度分布に特段の変化はなかった。

11月の現地調査では、日和山山頂爆裂火口の噴気温度は130℃以上の状態が続いていた。大湯沼湯面の北東側の一部で、地表面温度の低下が認められた。

GNSS連続観測では、地殻変動に特段の変化は認められなかった。

^{う す ざ ん}
有珠山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

山頂火口原の噴気活動及び地震活動は低調に経過した。

4月、9月及び10月の上空からの観測（4月及び9月は国土交通省北海道開発局、10月は北海道の協力による）及び7月の現地調査では、山頂火口原や西山西麓火口群及び金比羅山火口群の状況に特段の変化はなかった。昭和新山亀岩南側では、引き続き噴気温度のわずかな低下が認められた。

GNSS連続観測では、山頂部を挟む基線で1977年噴火に伴う貫入岩体の熱収縮によると考えられる短縮の変化が引き続き認められている。

ニセコ【噴火予報（活火山であることに留意）】

9月の上空からの観測（国土交通省北海道開発

局の協力による）では、イワオヌプリや五色温泉周辺に噴気や地熱域は認められず、地形や植生にも特段の変化はなかった。

^{ほっかいどうこまがたけ}
北海道 駒ヶ岳【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

山頂の火口カメラでは、昭和4年火口からのごく弱い噴気を度々観測した。噴気を観測した日数は、2021年頃と比べて増加した。一方、山麓の高感度監視カメラでは、1～3月にそれぞれ1日観測したのみだった。

3月、9月及び10月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）及び5月、10月の現地調査では、山頂火口原の各火口の噴気や地熱域の状況に特段の変化はなかった。

2023年12月から1月下旬頃にかけて、山頂火口原浅部（主に深さ1km付近）を震源とする地震が発生し、低周波地震が多くを占めた。3月23日に継続時間約1分43秒の火山性微動が発生し、火口原浅部の膨張を示唆するわずかな傾斜変動を伴った。4月以降、地震活動は概ね低調に経過した。

GNSS連続観測では、2022年頃から2023年頃にかけて、山頂火口原浅部の膨張を示すと考えられるわずかな地殻変動が一部の基線で観測されたが、2024年1月以降は概ね停滞して推移した。5月のGNSS繰り返し観測では、昭和4年火口を囲む基線で、昨年（2023年5月29日から6月1日）と比べ、引き続きわずかな伸長が認められた。

^{えさん}
恵山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

恵山溶岩ドーム西側の爆裂火口の噴気活動、地震活動は低調に経過し、GNSS連続観測では、地殻変動に特段の変化はみられなかった。

9月及び10月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、各火口の噴気や地熱域の状況に特段の変化はなかった。

^{おしまおしま}
渡島 大島【噴火予報（活火山であることに留意）】

9月の上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、寛保岳に噴気は認められず、寛保岳南東側内壁の弱い地熱域の地表面温度分布にも特段の変化はなかった。

【東北地方】

^{いわきさん}
岩木山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

監視カメラでは、噴気は確認されなかった。

火山性地震は観測されず、地殻変動には特段の変化はなかった。

^{はっこうださん}
八甲田山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

監視カメラでは、噴気は確認されなかった。

地震活動は低調に経過し、地殻変動には特段の変化はなかった。

10月に実施した現地調査では、地獄沼周辺、酸ヶ湯沢上流及び地獄湯ノ沢において、噴気や地表面の異常は認められなかった。

^{とわだ}
十和田【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

監視カメラでは、噴気は確認されず湖面の異常等も認められなかった。

1月8日に^{なかのうみ}中湖の北約5kmを震源とするマグニチュード3.7の地震を観測した。また、6月14日には2014年に観測を開始して以降初めてとなる火山性微動を観測した。

11月22日には中湖付近の深さ約6kmを震源とする火山性地震が一時的に増加し、228回を観測した。その後27日にかけてマグニチュード2を超える地震が5回発生した。傾斜計などその他の観測データには、これらの地震活動に伴う変化はみられなかった。その他の期間は、火山性地震は概ね少ない状態で経過した。

GNSS連続観測では、2023年前半から十和田湖を挟む東西の基線において、わずかな伸びの変化が認められている。

^{あきたやけやま}
秋田焼山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

焼山監視カメラ（国土交通省東北地方整備局）では、湯沼及び^{さけびさわ}叫沢源頭部の噴気の高さは100m以下で、噴気活動は概ね低調に経過した。

地震活動は低調に経過した。GNSS連続観測では、2020年中頃からの八幡平及び秋田焼山を挟む基線の伸びの変化が、2022年終わり頃からやや鈍化しつつも継続している。

3月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊の協力による）では、前回の観測と比較して、叫沢源頭部、湯沼付近、湯ノ沢上流、トキワ沢上流及び叫沢中流域の噴気や地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。

^{はちまんたい}
八幡平【噴火予報（活火山であることに留意）】

GNSS連続観測で2020年中頃からみられている八幡平及び秋田焼山周辺での膨張性の地殻変動は、2022年終わり頃からやや鈍化しつつも継続している。一元化震源では八幡平東部の茶臼岳周辺でややまとまった地震活動がみられている。

3月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊の協力による）では、よんご沼南の噴気や地熱域の状況に特段の異常は認められなかった。また八

幡沼周辺に噴気や地熱域は認められなかった。

いわてさん 岩手山【火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）】

岩手山周辺の傾斜計やひずみ計、GNSS 連続観測では、2024 年2月頃から山体の深いところの膨張を示す地殻変動が観測されている。こうした状況の中、JAXA の衛星「だいち2号」の観測結果を用いた国土地理院による SAR 干渉解析結果では、大地獄谷周辺及び岩手山西部周辺において約1年の間に衛星に近づく変動が見られる。大地獄谷周辺の変動は、ごく浅いところの膨張を示していると考えられる。このため、10月2日15時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）に引き上げた。

山頂付近では、2020 年4月頃から火山性地震の発生頻度がやや高い状態で推移しており、2024 年11月以降はさらに発生頻度が高まった。また、黒倉山付近で2024 年5月頃から計数基準に満たない微小な火山性地震が増加し、増減を繰り返しながら引き続き観測されている。

2月、5月、11月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊及び岩手県の協力による）、及び7月（岩手県との合同）、8月、9月、10月の現地調査では、岩手山山頂、大地獄谷、黒倉山等の噴気・地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。監視カメラでも、大地獄谷、黒倉山の噴気・地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。

あきたこまがたけ 秋田駒ヶ岳【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

山頂付近では2017 年9月以降、火山性地震の発生頻度がやや高い状態で推移しており、2024 年3月、4月、12月に山頂付近が震源と推定される低周波地震が7回発生した。山体の北では8月頃から火山性地震の発生頻度がやや高い状態で推移しており、11月10日には一時的に増加し160回を観測した。

女^め岳^{だけ}付近では、地熱活動が継続的に認められているが、仙岩峠監視カメラ（国土交通省東北地方整備局）では、女岳の噴気の高さは100m以下で、噴気活動は低調に経過した。地殻変動には特段の変化はなかった。

3月、5月、11月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊及び岩手県の協力による）、及び10月から11月にかけて実施した現地調査では、女岳付近の噴気や地熱域の状況に大きな変化は認められなかった。

ちようかいさん 鳥海山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

監視カメラでは、噴気は確認されなかった。

火山性地震は観測されず、地殻変動には特段の変化はなかった。

くりこまやま 栗駒山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

地震活動及び噴気活動は低調で、地殻変動にも特段の変化はなかった。

3月、5月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊及び岩手県の協力による）、及び5月の現地調査（岩手県との合同）では、ゼッタ沢上流、ゆげ山及び地獄釜の噴気や地熱域の状況に特段の変化はなかった。昭和湖に噴気や地熱域は認められなかった。

ひじおり 肘折【噴火予報（活火山であることに留意）】

12月に実施した現地調査では、肘折周辺に噴気や地熱域は認められなかった。

ざおうざん（ざおうさん） 蔵王山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

地震活動は低調で、地殻変動にも特段の変化はなかった。

監視カメラでは、丸山沢で一時的に100mの高さの噴気を観測したが、噴気活動は概ね低調であった。蔵王山御釜監視カメラ（国土交通省東北地方整備局）等では、御釜付近に噴気や地熱域は認められなかった。

2月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊の協力による）、8月、9月（東北大学との合同）の現地調査では、丸山沢噴気地熱地帯の噴気や地熱域の状況に大きな変化はみられなかった。また、御釜周辺、振子沢付近に噴気や地熱域は認められなかった。

あづまやま 吾妻山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

地震活動は低調に経過した。浄土平傾斜計では2023 年9月下旬から大穴火口方向の沈降を示す変化がみられ、また GNSS 連続観測の大穴火口周辺の短い基線の一部でも同時期から縮みの変化がみられる等、浅部の緩やかな収縮を示す変化がみられている。火山ガスのSO₂（二酸化硫黄）とH₂S（硫化水素）の濃度比は概ね静穏期の水準の値まで低下している。全磁力観測では、大穴火口浅部の熱消磁を示唆する変化は2023 年9月頃から鈍化し、12月以降は概ね停滞している。

監視カメラでは、大穴火口で一時的に200mの高さの噴気を観測したが、噴気の高さは概ね100m以下で経過した。

2月、6月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊及び福島県消防防災航空隊の協力による）では、大穴火口周辺の地熱域の状況に特段の変化

は認められなかった。4月から10月にかけて行った現地調査では、八幡焼南部の一部の地熱域にわずかな拡大傾向がみられているが、その他の噴気・地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。また火山ガス（二酸化硫黄）放出量は前年までと比べて特段増加していない。

安達太良山〔噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）〕

監視カメラでは、沼ノ平火口で一時的に30mの高さの噴気を観測したが、その他の期間には観測されなかった。

地震活動は低調に経過し、地殻変動には特段の変化はなかった。

2月、6月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊及び福島県消防防災航空隊の協力による）では、沼ノ平火口付近及び鉄山南斜面の地熱域の状況に特段の変化はなく、噴気は認められなかった。

磐梯山〔噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）〕

監視カメラでは、山体北側火口壁の噴気は100m以下で経過し、噴気活動は低調であった。

火山性地震は2022年11月からやや多い状態で経過し、12月末には山体北西部で活発な地震活動がみられ、その後減少したが2022年10月以前に比べてやや多い状態が続いている。5月及び7月、10月、11月には火山性微動が観測されたが、最大振幅は小さく継続時間も短いものであった。

GNSS連続観測で認められていた2022年後半からの山体膨張を示す変化は2023年10月頃から停滞している。

2月、6月の上空からの観測（陸上自衛隊東北方面隊及び福島県消防防災航空隊の協力による）、及び5月、11月に実施した現地調査では、山体北側火口壁噴気地帯や沼ノ平、中ノ湯の地熱及び噴気の状況に特段の変化は認められなかった。

【関東・中部地方、伊豆・小笠原諸島】

那須岳〔噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）〕

地震活動及び噴煙活動は低調で、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。

7月に実施した現地調査では、西斜面（無間地獄）の地熱域の広がりや西斜面の噴気孔Aの温度に前回（2021年4月）と比較して大きな変化は認められなかったが、噴気量は低下傾向にある。北西斜面では噴気及び地熱域は認められなかった。

日光 白根山〔噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）〕

地震活動は低調で、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。監視カメラでは噴気は観測されなかった。

草津 白根山（白根山（湯釜付近））〔噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）〕

湯釜付近を震源とする火山性地震は、低調に経過していたが、5月下旬以降、地震回数がやや増加して推移した。また、6月頃から噴気の化学成分比に活動の活発化を示す変化が認められ、東京工業大学の傾斜計でも湯釜付近の地下浅部を膨張源とする緩やかな地殻変動が認められた。湯釜近傍での臨時のGNSS観測でも一部の基線でごくわずかな伸びが認められた。水釜北東の地熱域では、周辺の非地熱域の温度と比較して、7月頃から温度上昇している領域が認められた。

奥山田監視カメラ（湯釜の北約1.5km）では、湯釜北側噴気地帯の噴気は高さ200m以下で推移しており、特段の変化は認められなかった。全磁力観測でも火山活動の高まりは認められなかった。湯釜湖水の成分分析でも火山活動の高まりを示す変化は認められなかった。常設の観測点によるGNSS連続観測では、火山活動によるとみられる変動は認められなかった。

4月から11月に実施した現地調査では、湯釜火口内北東側火口壁、湯釜火口北側及び北東側斜面の地熱域に特段の変化は認められなかった。また、湯釜湖面に硫黄とみられる浮遊物及び湧昇域が認められた。4月と11月に実施した上空からの観測（陸上自衛隊の協力による）でも、湯釜火口内の北東側火口壁面、湯釜火口北側及び水釜北東斜面の地熱域の分布に特段の変化は認められなかった。また、4月の観測では湯釜湖面に硫黄とみられる浮遊物及び湧昇域が認められた。

草津 白根山（本白根山）〔噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）〕

今期間噴気は観測されなかった。本白根山火口及び逢ノ峰付近を震源とする地震は、少ない状態で経過した。火山性微動は観測されなかった。GNSS連続観測では、火山活動によるとみられる変動は認められなかった。

5月に実施した現地調査では、鏡池北火口北側の火口列及び鏡池火口底の火口列で噴気及び地熱域は認められなかった。

4月と11月に実施した上空からの観測（陸上自衛隊の協力による）でも、鏡池北火口及びその周辺で噴気は認められず、日射の影響を超えるような地熱域は確認されなかった。

あさまやま

浅間山【火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）】

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は200～1300トン、概ね500トン前後で、2023年3月以前に比べて多い状態で経過した。山体浅部を震源とする火山性地震の回数は、2023年7月下旬以降、概ね少ない状態で経過していたが、4月中旬から増加し、やや多い状態が継続した。3月中旬から5月まで、浅間山の西側での膨張を示すと考えられるわずかな傾斜変動が観測された。

4月と11月に実施した上空からの観測（陸上自衛隊の協力による）では、噴気孔の位置や地形等に変化はみられず、火口底や火口周辺に新たな噴出物の形跡は認められなかった。赤外熱映像装置による観測でも、前年の観測と比較して地表面温度の分布に特段の変化はなく、引き続き火口底中央部の火孔付近と西側領域などで温度の高いところがみられた。

にいがたやけやま

新潟 焼山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

噴煙活動及び地震活動は、低調に経過した。GNSS 連続観測でも、火山活動によるとみられる変動は認められなかった。

8月に実施した上空からの観測（新潟県消防防災航空隊の協力による）では、前回（2023年5月）まで高温領域が認められた山頂部東側斜面にあるB噴気孔では、日射の影響を超えるような目立った高温領域は認められず、その他の場所についても日射の影響を超えるような目立った高温領域は認められなかった。9月に実施した現地調査では、B噴気孔で、前回の観測（2022年9月）と同様に、高さ数十mの噴気が認められたが、噴気量は減少していた。山頂部東斜面にあるE噴気孔周辺では、前回の観測と同様に、弱い噴気が認められた。山頂火口内東側の地熱域では、前回の観測で、高さ数m程度の弱い噴気が複数箇所で認められたが、今回は確認されなかった。

みょうこうさん

妙高山【噴火予報（活火山であることに留意）】

8月に実施した上空からの観測（新潟県消防防災航空隊の協力による）では、前回（2023年5月）の観測で噴気が確認された火口原南側の地獄谷噴気地帯については雲がかかっていたため確認できなかった。その他の場所では噴気や地熱域は認められず、特段の変化は認められなかった。

みだかはら

弥陀ヶ原【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

今期間、地獄谷周辺の地震活動は、概ね低調に経過した。1月に地獄谷の南4km 付近及び南1km 付近を震源とする地震が一時的に増加したが、

これらの地震活動の前後で、弥陀ヶ原の想定火口域付近浅部での地震活動や噴気活動に特段の変化は認められなかった。また、火山性微動は観測されなかった。地殻変動には特段の変化は認められなかった。一方、地獄谷では活発な熱活動が続いている。

10月に実施した現地調査では、2012年6月以降、噴気活動の活発化がみられる地獄谷で活発な噴気活動が継続していた。また、噴気地帯に対応する地熱域が引き続き確認されたが、前回（2023年10月）と比較してその分布に大きな変化は認められなかった。

やけだけ

焼岳【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

北峰付近の噴気孔からの噴気、黒谷火口からの噴気及び岩坪谷上部の噴気孔からの噴気の高さは、概ね200m以下で経過した。山頂付近の微小な地震が継続して発生した。周辺の地震活動は、低調に経過した。GNSS 連続観測では、山頂付近での緩やかな膨張を示す変化が継続した。

山頂付近の微小な地震は、3月下旬以降やや多い状態となり、5月下旬からさらに地震回数が増加し7月中旬まで続いた。この活動に同期して、GNSS 連続観測では、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる基線長の伸びの変化率が増加した。7月下旬からは鈍化した。6月に実施した繰り返し GNSS 観測や光波測距観測でも、2021年以降、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる斜距離のわずかな変化が認められた。同時に実施した現地調査では、北峰の噴気温度や北峰東斜面の地熱域の広がりには大きな変化は認められなかった。

のりくらだけ

乗鞍岳【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

地震活動は低調で、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。監視カメラでは噴気は観測されなかった。

おんたけさん

御嶽山【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

噴煙活動や山頂直下付近の地震活動は緩やかな低下が続き、火山活動は静穏に経過したが、12月中旬以降、剣ヶ峰山頂付近の直下を震源とする微小な火山性地震の発生頻度がやや多くなった。剣ヶ峰南西斜面の一部の噴気孔では引き続き勢いよく噴気が出ており、地熱域の温度は高い状態が継続し、噴気活動は2014年の噴火前の状態には戻っていない。地殻変動観測では、火山活動によるとみられる変動は認められなかった。

7月に実施した現地調査では、一ノ池及び二ノ池では噴気や地熱域は認められなかった。また、

剣ヶ峰山頂の南西側の火口列の一部の噴気孔で、引き続き活発な噴気活動と温度の高い部分が認められた。8月に実施した現地調査では、三ノ池及び四ノ池、79-7 火口でも噴気や地熱域は認められなかった。

白山 はくさん **【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】**

今期間、地震活動は概ね低調に経過したが、11月4日の19時21分に山頂付近のやや深部を震源とするマグニチュード4.2の地震が発生し、岐阜県高山市で最大震度2を観測した。その後、8日にかけて地震が一時的に増加した。白山では、これまでも同様の場所で一時的な地震の増加が時折発生している。監視カメラでは噴気は観測されなかった。

富士山 ふじさん **【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】**

地震活動は概ね低調に経過した。深さ15km付近を震源とする深部低周波地震は低調に経過した。監視カメラでは噴気は観測されず、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。

箱根山 はこねやま **【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】**

監視カメラによる観測では大涌谷の火口や噴気孔及び温泉供給施設から引き続き噴気が勢いよく噴出していた。

地震活動は概ね低調に経過したが、4月29日に芦ノ湖の北西端付近で一時的に地震が増加し、8月11日には大涌谷付近で長周期成分を含む微小な火山性地震が1回発生した。火山性微動は観測されなかった。

GNSS連続観測では、2023年に箱根山を挟む基線の一部で伸びが認められたが、1月頃からは停滞した。傾斜観測では、火山活動によるとみられる特段の変化は認められない。

7月に実施した上空からの観測（陸上自衛隊の協力による）では、上湯場、早雲地獄及び湯ノ花沢において、目立った噴気は認められず、以前の観測と同様の領域で地熱域の分布が確認された。これらの地熱域及び大涌谷以外では、噴気及び明瞭な地熱域は認められなかった。

伊豆 東部 火山群 いず とうぶ かせんぐん **【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】**

地震活動は概ね低調に経過し、火山性微動は観測されず、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。監視カメラでは噴気は観測されなかった。

伊豆 大島 いず おおしま **【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】**

現地調査や監視カメラによる観測では、三原山山頂火口内やその周辺、剣ヶ峰付近や三原新山付近の噴気活動は低調で、地熱域にも特段の変化は認められなかった。

火山性地震は期間を通して少ない状態で経過した。火山性微動の発生はなかった。

1986年の噴火以降長期的に継続していた山体の膨張は、2018年頃からほぼ停滞しているが、これまでに供給されたマグマは地下深部に蓄積されていると考えられる。約1～3年周期で膨張と収縮を繰り返す地殻変動は、2023年9月頃からみられていた収縮の傾向が、7月頃から膨張に転じた。

新島 にいじま **【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】**

地震活動は概ね低調で、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。監視カメラでは噴気は観測されなかった。

神津島 こうづしま **【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】**

地震活動は概ね低調で、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。監視カメラでは噴気は観測されなかった。

三宅島 みやけじま **【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】**

地震活動及び噴煙活動は低調で、火山ガス放出量も極めて少ない状態で経過した。しかし、地殻変動観測では山体が膨張する変化が継続しており、地下のマグマの蓄積が進んだと考えられる。また、2019年4月頃からみられていた、山体浅部の膨張を示すと考えられるGNSSの基線長の伸びは、2023年に入り停滞した。

山頂火口北西監視カメラによる観測及び期間中実施した現地観測によると、山頂火口内の主火孔及びその周辺で引き続き地熱域が認められ、特段の変化はなかった。山頂火口内の地形、噴気に特段の変化は認められなかった。

山頂火口内の地熱域についての解析から、山頂火口全体の地熱域に注目すると、2022年以降、温度の上昇や放熱率の増加傾向が認められた。主火孔付近では温度の上昇や放熱率の増加傾向がみられないことから、主火孔周辺の地熱域で温度上昇や放熱率が増加していることを示している。

八丈島 はちじょうしま **【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】**

地震活動は低調で、地殻変動にも特段の変化は

認められなかった。監視カメラでは噴気は観測されなかった。

^{あおがしま}
青ヶ島【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】

地震活動は低調で、地殻変動にも特段の変化は認められなかった。監視カメラでは噴気は観測されず、丸山西斜面とカルデラの西側内壁の地熱域にも特段の変化は認められなかった。

^{れつがん}
ベヨネース列岩【噴火警戒（周辺海域警戒）及び火山現象に関する海上警戒】

今期間、気象衛星ひまわりでは噴火は認められなかった。5月6日、7月18日、12月25日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、ベヨネース列岩及び明神礁付近で変色水域等の特異事象は認められなかった。

^{すみすじま}
須美寿島【噴火警戒（周辺海域警戒）及び火山現象に関する海上警戒】

海上保安庁が実施した上空からの観測で、7月18日に東岸から約300mにかけて、茶褐色～黄緑色の変色水域が確認された。また、9月18日の同庁の観測では、北岸より北西1,800mにかけて薄い青白色の変色水が確認され、西岸及び変色水に沿って灰白色のごく少量の浮遊物も確認された。海底噴火が発生する可能性があるため、9月19日に噴火警戒（周辺海域）及び火山現象に関する海上警戒を発表した。その後、10月、11月、12月に同庁または同庁の協力により気象庁が実施した上空からの観測でも変色水が確認された。今期間、気象衛星ひまわりでは噴火は認められなかった。

^{いずとりしま}
伊豆鳥島【噴火予報（活火山であることに留意）】

海上保安庁が実施した上空からの観測では、4月20日に北部の船見岬周辺及び南東岸の三ツ石～燕埼の間で、変色水域が認められた。9月18日の同庁の観測では、東岸～南岸～西岸にかけて薄い緑褐色の変色水域及び灰色の少量の浮遊物が認められた。12月25日の同庁の観測では、北岸の一部と南岸の一部で少量の青白色の変色水が認められ、硫黄山中央火口よりごく少量の白色噴気が確認された。

^{にしおしま}
西之島【火口周辺警戒（入山危険）及び火山現象に関する海上警戒】

気象衛星ひまわりによる観測では、噴火は確認されなかった。西之島付近の地表面温度も周囲とほとんど変わらない状態で経過した。

4月から12月にかけて行われた海上保安庁または同庁の協力により気象庁が実施した上空か

らの観測では、火砕丘中央火口内や周辺で複数の白色噴気の放出及び硫黄昇華物の分布が確認され、島のほぼ全周に広範囲の変色水域が確認された。また、同庁による6月の観測では、火口底に茶褐色の湯だまりが認められ、9月以降の観測でも、緑白色～灰白色の火口湖が確認された。

^{かいとくかいざん}
海徳海山【噴火警戒（周辺海域警戒）及び火山現象に関する海上警戒】

気象衛星ひまわりでは噴火は認められなかった。11月及び12月の海上保安庁または同庁の協力により気象庁が実施した観測では変色水域等の特異事象は観測されなかった。

^{いおうとう}
硫黄島【火口周辺警戒（火口周辺危険）及び火山現象に関する海上警戒】

海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、2023年12月31日から1月6日にかけて、2月28日から4月19日にかけて、及び、7月15日から21日にかけて、翁浜沖で断続的に噴火が発生した。黒色の噴出物を含む水柱が、数分から30分に1回程度の間隔で、海面から最大60m程度の高さまで上がり、白色の噴気が上がる様子が確認された。また、噴火地点付近では、変色水や軽石と思われる浮遊物も確認された。

海上自衛隊の協力を得て、3月7日から14日にかけて実施した現地調査でも、噴火活動が認められ、最近の噴火で噴出したマグマと考えられる高温の軽石を翁浜で確認した。

期間中海上保安庁が繰り返し実施した上空からの観測でも、3月16日に翁浜沖約600mで間欠的に激しく海水が沸き上がる小規模な噴火が認められた。2023年10月下旬からの翁浜沖の噴火に伴って形成された陸地は、浸食により面積が減少し、2月には幅25m、高さ約10mのアーチ状の固結部のみが残存していることが認められたが、10月の観測では消滅したのが確認された。島の周囲では、変色水域が確認された。

また、海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、5月3日及び4日に、島北西部の井戸ヶ浜で噴火が確認された。この噴火では、高さが最大で50から200m程度の火山灰が混ざった噴水状の噴出が、数分から数十分の間隔で認められた。阿蘇台東監視カメラ（井戸ヶ浜の噴火地点から南東約1,700m）でも、3日から19日にかけて井戸ヶ浜で断続的に発生する噴火（高さが最大で100m程度の土砂噴出）を観測した。

海上自衛隊の協力を得て、10月17日から26日にかけて実施した現地調査では、井戸ヶ浜の火口周辺で白色噴気及び地熱域を確認した。また、島北東部の金剛岩付近の海岸では泥及び白色噴気を噴出する地点を新たに確認した。

翁浜沖での噴火に伴い、単色型微動¹⁾が断続的

に観測されたが、その他の火山性地震や微動はやや少ない状況で経過した。GNSS 連続観測では、引き続き長期的な島全体の隆起が継続した。

福徳岡ノ場 ふくとくおか **【噴火警報（周辺海域警戒）及び火山現象に関する海上警報】**

気象衛星ひまわりでは噴火は認められなかったが、10月、11月、12月に海上保安庁または同庁の協力により気象庁が実施した上空からの観測では、変色水が確認された。

【九州地方、南西諸島】

鶴見岳・伽藍岳 つるみだけ がらんだけ **【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】**

噴気地帯の状況に特段の変化はない。

火山性地震は概ね少ない状態で経過したが、2月中旬には鶴見岳の山体浅部を震源とする振幅の大きな火山性地震が発生し、地震活動の一時的な高まりがみられた。また、鶴見岳付近が震源と推定されるB型地震²⁾が時々発生している。

地殻変動観測では、特段の変化は認められなかった。

九重山 くじゅうさん **【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】**

硫黄山付近では噴気活動は低調に経過した。噴気地帯の地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。

火山性地震は少ない状態で経過した。

地殻変動観測では特段の変化は認められなかった。

長期的には地熱域の温度に低下傾向が認められるが、硫黄山付近の噴気地帯地下の温度上昇（熱消磁）を示唆する全磁力の変化が観測されている。

阿蘇山 あそさん **【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】**

阿蘇山では、2023年12月頃から火山活動の高まりがみられたが、7月以降は活動の高まりを示す特段の変化は認められない。

火山性微動の振幅は2023年12月頃から時折やや大きな状態となった。3月下旬以降は概ね小さな状態で経過したが、5月中旬から6月中旬頃にかけてと11月上旬に一時的な増大がみられた。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、2023年12月頃から増加傾向がみられ、1月から2月には最大で2,000トン程度まで増加した。その後は放出量に減少傾向がみられ、7月頃から概ね少ない状態で経過した。

中岳第一火口では、1月中旬頃から7月上旬頃にかけて、火映を夜間に観測したが、7月中旬以降は認められていない。

現地調査では、湯だまり³⁾量は2023年12月には約2割まで減少したが、その後次第に増加し、11月には約8割となった。1月中旬には火口内で高さ5m程度の土砂噴出を確認したが、その後土砂噴出はみられていない。南側火口壁の地熱域では2023年12月頃から温度の上昇傾向がみられ、5月には700℃を超える高温となったが、その後温度の低下傾向がみられている。

GNSS 連続観測では、2023年12月頃から1月中旬頃にかけて草千里付近深部のマグマだまりへのマグマの蓄積を示すと考えられる地殻変動が観測された。

噴火警報・予報の発表状況

1月23日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを1から2に引上げ（火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加、地殻変動の観測）

4月26日 噴火予報発表

噴火警戒レベルを2から1に引下げ

5月15日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを1から2に引上げ（火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加、微動振幅の増大）

7月19日 噴火予報発表

噴火警戒レベルを2から1に引下げ

雲仙岳 うんげんだけ **【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】**

雲仙岳では火山活動は静穏に経過した。

平成新山では噴気活動は低調に経過した。

火山性地震は少ない状態で経過した。震源は普賢岳から平成新山直下の浅いところで、橘湾付近における地震は観測されなかった。また、火山性微動は観測されなかった。

GNSS 連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められなかった。

霧島山（えびの高原（硫黄山）） きりしまやま いおうやま **【噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）】**

硫黄山の南側の噴気地帯では、噴気活動が活発な状態で経過し、一部の噴気孔からの泥の飛散や熱水の噴気孔外への流出を時折確認した。硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、弱い噴気活動がみられていたが、4月下旬以降噴気は認められていない。

赤外熱映像装置による観測では、硫黄山周辺の噴気地帯で地熱域を確認しているが、その分布や温度に特段の変化は認められていない。

GNSS 連続観測では、2023年5月頃から硫黄山

の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられていたが、同年11月頃から停滞している。

硫黄山付近では、火山性地震は少ない状態で経過した。火山性微動は観測されていない。

韓国岳周辺や大浪池付近などえびの高原周辺では、8月8日16時43分頃の日向灘の地震の影響を受けていると考えられる地震活動がみられたが、硫黄山近傍の噴気活動や地震活動、地殻変動に特段の変化は認められていない。

きりしまやま おおはたいけ
霧島山（大幡池）[噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

噴気は認められなかった。現地調査では大幡池の湖底からの火山ガスの噴出を確認した。

火山性地震は少ない状態で経過し、火山性微動は、観測されなかった。

地殻変動観測でも特段の変化は認められていない。

きりしまやま しんもえだけ
霧島山（新燃岳）[火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）]

新燃岳火口直下を震源とする火山性地震は、10月下旬頃から増加傾向にある。また、11月中旬及び12月中旬には継続時間の短い火山性微動を観測した。

監視カメラによる観測や現地調査では、新燃岳火口内の噴煙や地熱域には特段の変化は認められていない。火口西側斜面の割れ目の噴気活動は2024年に入り低下し、割れ目付近にみられていた地熱域は3月以降不明瞭となっていたが、11月以降実施した現地調査で再び確認されている。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は検出限界未満で経過している。

GNSS連続観測では、11月頃から、新燃岳付近の地下の膨張を示すと考えられる、基線のわずかな伸びが認められている。

噴火警報・予報の発表状況

12月12日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを1から2に引上げ（火山性地震の増加と新燃岳周辺GNSS基線の伸び）

きりしまやま おはち
霧島山（御鉢）[噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

火口縁を越える噴煙は認められなかった。

火山性地震は少ない状態で経過し、火山性微動は観測されなかった。

地殻変動観測でも特段の変化は認められていない。

まぐらじま
桜島 [火口周辺警報（噴火警戒レベル3、入山規制）]

南岳山頂火口では噴火活動が継続しており、年間で噴火⁴⁾が99回発生し、このうち爆発⁴⁾は46回であった。大きな噴石は最大で4合目（南岳山頂火口より約1,500m）まで飛散し、噴煙は最高で火口縁上5,000mまで上がった。また、同火口における火映は、夜間にほぼ連日観測された。

昭和火口では、1月にごく小規模な噴火が発生したが、その後噴火は発生していない。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、概ね多い状態で経過している。

火山性地震は少ない状態で経過している。また、主に噴火に伴う火山性微動を時々観測した。

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、火山活動に伴う特段の変化は観測されていない。GNSS連続観測では、桜島島内の基線で2024年1月頃から山体収縮に伴うとみられるわずかな縮みが認められている。また、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）を挟む基線では長期にわたり始良カルデラの地下深部の膨張を示す緩やかな伸びがみられている。始良カルデラの地下深部には、マグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられる。

まつまいおうじま
薩摩硫黄島 [火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）]

硫黄岳火口では、9月1日と3日に噴火が発生し、噴煙が最高で火口縁上1,000mまで上がった。これらの噴火に伴う大きな噴石は確認されていない。

硫黄岳火口では、白色の噴煙が時々高く上がり、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測するなど、長期的には熱活動が高まった状態で推移している。

火山性地震は概ね少ない状態で経過したが、11月中旬に一時的な増加がみられた。火山性微動は観測されなかった。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり1,000トン前後の状態が継続している。

GNSS連続観測では、島内の一部の基線で2015年頃から長期的な縮みの傾向が認められている。

くちのえらぶじま
口永良部島 [火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）]

口永良部島では、2023年6月以降、主に古岳付近を震源とする火山性地震が次第に増加し、同年7月に入ってさらに増加した。その後も消長を繰り返しながらやや活発な地震活動が継続している。新岳付近を震源とする火山性地震は、2024年に入り少ない状態で経過している。新岳西側山麓のやや深いところを震源とする地震は1月、7月及び8月に発生したが、少ない状態であった。

GNSS連続観測では、2023年6月頃から10月頃にかけて古岳付近の膨張を示唆する変動が観測されたが、同年11月以降、山体のさらなる膨張を示す変動は認められていない。

繰り返し実施した山麓からの現地調査や上空からの観測では、古岳火口内やその周辺において、2024年に入り噴気量の減少や地熱域の温度の低下傾向が確認されている。11月下旬と12月上旬に実施した火口付近における現地調査では、古岳火口内の地熱域は、2023年6月以前に比べると広がった状態であった。新岳の噴煙活動や地熱域の状況には特段の変化は認められていない。

火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は2023年9月以降次第に減少し、概ね100トン未満と少ない状態で経過しており、9月以降は検出限界未満の日もみられている。

噴火警報・予報の発表状況

3月27日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを3から2に引下げ（火山性地震の減少）

4月13日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを2から3に引上げ（火山性地震の増加）

10月18日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを3から2に引下げ（火山性地震の減少）

11月20日 噴火予報発表

噴火警戒レベルを2から1に引下げ

12月6日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを1から2に引上げ（火山性地震の増加）

諏訪の瀬 島【火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）】

御岳 火口では、噴火活動が継続し、爆発も時々発生した。

噴火に伴う火口周辺への大きな噴石の飛散を確認し、1月14日の爆発では、火口中心から約1,100mまで飛散した。また、噴火に伴う噴煙は最高で火口縁上2,300mまで上がった。

GNSS 連続観測では、島の西側深部におけるマグマの蓄積量のさらなる増加と推定される変動は認められていない。傾斜計では、火山活動による特段の変動は観測されていない。

島の西側を震源とする火山性地震は、4月頃から一時的な増加が時々みられており、体に感じる規模の地震も含まれた。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり1,000トン前後で経過している。

噴火警報・予報の発表状況

1月14日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを2から3に引上げ（大きな噴石の飛散）

1月17日 火口周辺警報発表

噴火警戒レベルを3から2に引下げ

3月27日 火口周辺警報発表

火口周辺警報（噴火警戒レベル2）の切替（警戒が必要な範囲の変更）

硫黄鳥島【噴火予報（活火山であることに留意）】

7月に第十一管区海上保安本部が実施した上空からの観測では、硫黄岳火口底及びグスク火山の火口北側内壁の噴気孔で、前回の観測（2023年10月）に引き続き白色の噴気を確認された。また、島の北西岸で緑白色～緑色の変色水域の分布が認められた。

9月に気象庁の海洋気象観測船「凌風丸」が実施した海上からの観測でも、硫黄岳火口及びグスク火山火口周辺火口で、白色の噴気を確認した。10月に気象庁の海洋気象観測船「啓風丸」が実施した海上からの観測では、9月に引き続き、硫黄岳火口及びグスク火山火口周辺で、白色の噴気を確認したが、噴気量に特段の変化は認められなかった。いずれの観測でも、風下側で硫化水素臭を確認した。また、10月の観測では、硫黄岳火口付近の海岸で変色水域が認められた。

1) 「単色型微動」

単一な周波数の微動。硫黄島の場合、翁浜沖で発生する海底噴火に際して、噴火の発生時刻に対応して発生しており、発震源は翁浜沖のごく浅いところと推定されている。

2) 「B型地震」

火山性地震のうち、相が不明瞭で、比較的周期が長く、火口周辺の比較的浅い場所で発生する地震。火道内のガスの移動やマグマの発泡などにより発生すると考えられている。

3) 「湯だまり」（阿蘇山）

阿蘇山の活動静穏期の中岳第一火口には、地下水などを起源とする約40～60℃の緑色の湯がたまっており、これを湯だまりと呼んでいる。火山活動が活発化するにつれ、湯だまり温度が上昇・噴湯して湯量の減少や濁りがみられ、その過程で土砂を噴き上げる土砂噴出現象等が起こり始めることが知られている。

4) 「噴火」（桜島）

桜島では噴火活動が活発なため、噴火のうち、爆発もしくは噴煙量が中量以上（概ね噴煙の高さが火口縁上1,000m以上）の噴火の回数を計数している。資料の噴火回数はこの回数を示す。また、基準に達しない噴火は、ごく小規模な噴火として噴火回数に含めない。